余市の人々。　第１８回　【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！　タイトル「Jijiya・Babaya」

「余市を素通りされたくなかったんです」

僕の質問に、さっきとは打って変わって、辻さんはきっぱり答えます。問いかけたのは、なぜ余市でイタリアンレストランを始めたんですか、ということ。

「私が子供の頃からずっと、余市の人はおいしいものが食べたいと思ったら、小樽に行ったり、札幌まで足を伸ばしたりすることが多かったんですよね」

辻さんは余市で生まれ、余市で育った。実家は建設会社を経営していた。おいしいの想い出は、ハレの日の外食ではなく、家での食事会。

「父と母は料理上手で、しょっちゅういろんな人を招いて手料理を振る舞っていたんです。大きな鍋で三平汁をつくったり、冬に漬けたニシンを並べたりして、お客さまを迎える準備をしていたことをよく憶えています。食事をわいわいと楽しく食べるという生活が小さい頃から当たり前のようにあって、私もよく手伝っていました」

けどね、と辻さんは言います。食べることが大好きだった両親との外食は、やっぱり小樽や札幌だったんです、と。余市でご馳走を食べに行った記憶はあったかなぁと、遠くを見つめてひと言。「余市の人たちは地元においしいお店があるって思わなかったんじゃないかな」。曰く「余市の人って控えめなのかもしれないですね。隣の芝生がきれいに見えちゃうタイプなのかも。だから素通りなんじゃないかな」。

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「ＷＥＢ本の雑誌。」（https://www.webdoku.jp/column/ebe/）に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020.11.30

問合せ　企画政策課　企画グループ　☎２１―２１１７

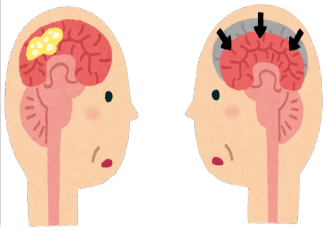
みんなで学ぼう認知症　～レビー小体型認知症について①～

☆レビー小体型認知症とは

レビー小体型認知症は、三大認知症（アルツハイマー型認知症・脳血管性認知症・レビー小体型認知症）の一つです。高齢者世代の発症が多いですが、早い人だと４０代で発症する人もいます。レビー小体とは、神経細胞に出来る特殊なたんぱく質です。レビー小体型認知症では、レビー小体が脳の大脳皮質（人がものを考える時に重要な役割を持つ場所）や、脳幹（呼吸や血液の循環に関わる重要な場所）にたくさん集まります。レビー小体がたくさん集まっている場所では、神経細胞が壊れて減少している為、神経を上手く伝えられなくなり、認知症の症状が起こります。レビー小体型認知症は、ほかの認知症に比べ『認知機能障害』をはじめさまざまな症状が出現します。また、進行が速いため、早期受診等できるだけ早く対策を行っていくことが重要です。

レビー小体型認知症とアルツハイマー型認知症の特徴の違い

レビー小体型認知症
レビー小体が大脳皮質や脳幹に蓄積
▼
脳内の伝達神経が減る
▼
特徴：幻視※1　や
パーキンソン症状※2



アルツハイマー型認知症
アミロイドβ（特殊なたんぱく質）が脳に蓄積
▼
脳全体が委縮する
▼
特徴：時間や場所がわからない

※１幻視：存在しないものが見える
※２パーキンソン症状：手足のふるえ、動きが遅くなるなど

☆　認知症サポーターになりませんか？

余市町では、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域に暮らす認知症の人やそのご家族を理解できるよう、認知症サポーター養成講座を開催しています。興味のある方はお気軽にお問い合わせください。
※人数や開催日程、会場の相談などお受けできます。

相談場所も充実
役場 保険課 介護認定グループ　☎２１―２１１９　子育て・健康推進課　☎２１－２１２２
地域包括支援センター　☎４８―６０１５　在宅介護支援センターかるな　☎２２―３１１５
認知症の人々を支える家族の会（社協内）　☎２２－３１５６
小樽市立病院（認知症疾患医療センター）　☎０１３４－２５－１２１１